

トリノ——昨日、今日、そして常に進化し続ける街

CIRP の皆さまへ

以下に、私たちの街トリノとその美しい名所にまつわる情報や逸話、歴史的背景をいくつかご紹介いたします。これは観光ガイドではありませんが、皆さまにこの街の第一印象をお伝えし、これから共に発見していく体験をより深く味わっていただくための一助となれば幸いです。

Silvia, Barbara and Emanuela



T. 坂尾教授のご協力により、テキストを修正・校閲しました。

アウグスタ・タウリノルムからトリノへ——二千年以上にわたる歴史の旅

街を歩いていると想像してみてください。トリノの石畳や建物の一つひとつが、何千年も前に始まった物語を静かに語りかけてきます。

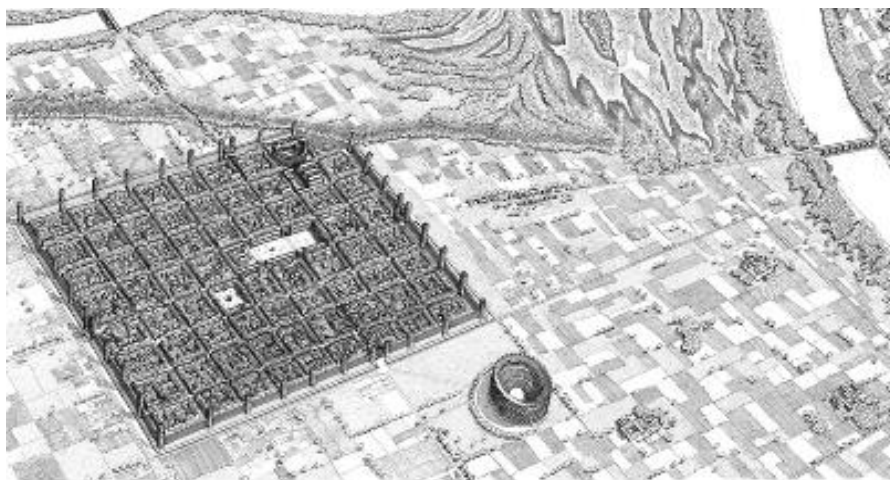
優雅な宮殿が建ち並ぶ以前、この地にはケルト系リグリア人の一族であるタウリニ族が暮らしていました。トリノの象徴である「雄牛」（イタリア語 **toro**、ラテン語 **taurus** に由来）は、この誇り高き民族にちなんだものと伝えられています。紀元前 **218** 年、カルタゴの将軍ハンニバルが **37** 頭の象を率いてアルプスを越え、イタリア半島へ進軍した際、タウリニ族は勇敢にこれに抵抗しました。



現在のトリノの基礎が築かれたのは紀元前 **28** 年頃のことです。ユリウス・カエサルの養子であり、ローマ帝国初代皇帝となったアウグストゥスが「アウグスタ・タウリノルム」（直訳すると「タウリニ族のアウグスタ」）を建設しました。ローマ人はこの都市を碁盤目状に整然と区画し、今日「ローマ四辺形地区（クアドリラテロ・ロマーノ）」として知られる区域を形づくりしました。

そのローマ時代の痕跡は、今なお街の中に残されています。堂々とそびえ立つパラティーナ門（**Porta Palatina**）は、当時トリノがガリア（現在のフランス）へ向かう重要な戦略拠点であったことを物語っています。

しかし、ローマ時代の生活は城壁や兵士だけではありませんでした。パラティーナ門の近くにはローマ劇場の遺構や円形闘技場の跡があり、この都市が文化と娯楽の中心地でもあったことを示しています。今日ローマ四辺形地区の小道を歩くと、私たちは二千年前に人々が壮大な公開競技観覧のために集まった場所の上を歩いているのです。



やがて時代は流れ、都市は中世の封建都市へと姿を変えていきます。そして **1563** 年、歴史の大きな転換点が訪れます。ヨーロッパ最古級の王朝の一つであるサヴォイア家が、首都をシャンベリー（フランス）からトリノへ移しました。このときから都市はバロック様式という新たな芸術言語をまとい、人々を驚かせ、魅了する舞台へと変貌していきます。

その歴史の重なりを象徴する建物がパラッツォ・マダマです。背面にはローマ時代の城門跡の上に築かれた中世の塔が立ち、正面には建築家フィリッポ・ユヴァッタによる透明感あふれるバロックのファサードが広がります。「王妃たち（**Madame Reali**）」の意向によって、要塞は光に満ちた宮殿へと生まれ変わりました。近くには王宮が建ち、サヴォイア家の権力の中心となっていきます。

都市中心部が統治の象徴として確立される一方で、サヴォイア家は「歓喜の王冠」と呼ばれる壮大な構想も打ち立てました。それは、トリノを中心に放射状に広がる一連の離宮群であり、狩猟

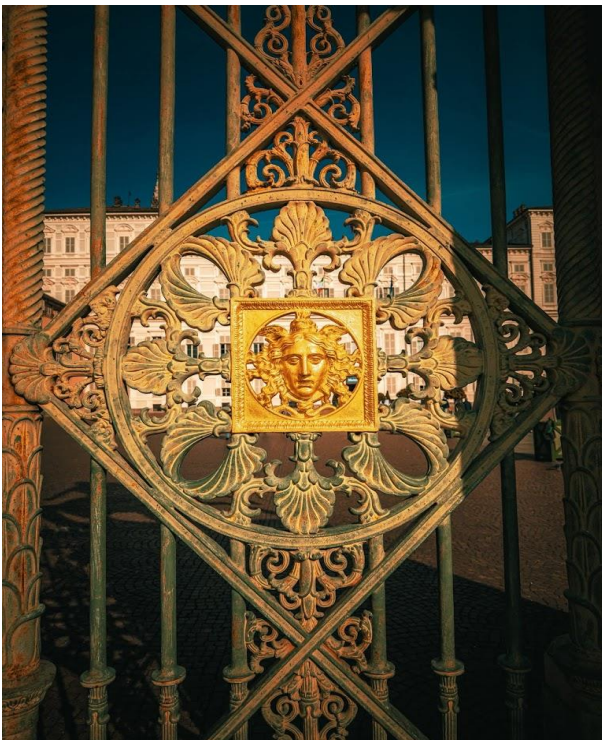
や余暇、宮廷の祝宴のために建設されたものです。ヴァレンティーノ城、ヴェナリア王宮、そしてストッピニジの狩猟館もその一部です。

19世紀はトリノにとってもう一つの重要な章となります。政治・社会・文化・軍事の各側面からなる「リソルジメント（イタリア統一運動）」において、トリノは中心的役割を果たしました。そして1861年、イタリア王国が成立すると、トリノは統一イタリア最初の首都となります。

その後、首都はフィレンツェ、さらにローマへと移されましたが、トリノは衰退することなく、新たな方向へと進みます。政治都市から工業と自動車の都へと転換し、19世紀末から20世紀初頭にかけてFIAT（フィアット）が誕生しました。これにより多くの労働者と投資家が集まり、都市は拡大し、優雅なリバティ様式の建築が街並みに彩りを添えました。

そして新世紀の幕開けとともに、もう一つの大きな転機が訪れます。2006年の冬季オリンピックは多額の投資をもたらし、トリノの真の魅力を世界に示しました。深い歴史的遺産、エジプト博物館や国立映画博物館といった世界的な文化施設、そして豊かな食文化を背景に、トリノは国際的な文化・観光都市として確固たる地位を築いています。

揺るぎない気品と控えめな魅力を併せ持つこの街へ、ようこそ。トリノは、訪れる人々を静かに、そして確実に魅了し続けます。



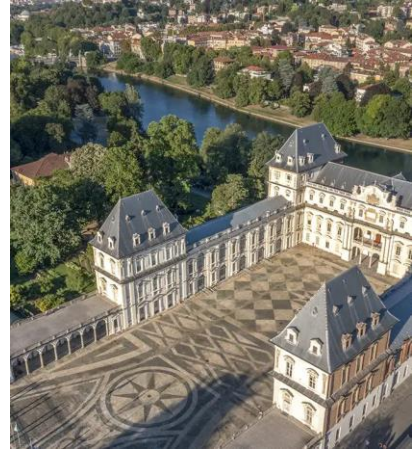
ヴァレンティーノ城 (CASTELLO DEL VALENTINO)

ポー川のほとり、かつてトリノ城壁の外に建っていた河畔の別荘の跡地に、ヴァレンティーノ城はそびえ立っています。その歴史は、王朝の野心、フランス的趣味、そして幾度も建築的変容が織りなす物語であり、サヴォイア家建築の中でも最も優雅な象徴の一つとなっています。

起源と「王妃」の影響 (Madama Reale)

16世紀にまでさかのぼる記録が残っていますが、この城の運命が大きく変わったのは1619年のことです。サヴォイア公ヴィットーリオ・アメデーオ1世が、妻であるフランスのクリスティーナにこの城を贈りました。

彼女こそが有名な「王妃 (Madama Reale)」であり、この居城を故郷フランスの宮廷様式に倣ったメゾン・ド・プレザンス (Maison de Plaisance) へと改装しました。建築家カルロ・ディ・カステッラモンテおよびアメデーオ・ディ・カステッラモンテの指揮のもと、建物は特徴的なU字型の構造へと整えられました。四隅には高い塔が配され、急勾配のスレート屋根がアルプス以北の様式を思わせます。主階 (piano nobile) にある黄道の間、百合の間、榮譽の間などは、ルガーノ地方出身の職人たちによる貴重なフレスコ画や漆喰装飾で彩られています。そこには花や象徴的な意匠、そしてサヴォイア家の栄光を讃える主題が描かれ、城はやがて宮廷生活の中心、華やかな祝宴や政治的駆け引きの舞台となりました。



衰退と再生

1663年にクリスティーナが亡くなった後、ヴァレンティーノ城は長い衰退期に入ります。

ナポレオン統治下では建物は荒廃し、一時は兵舎や倉庫として使用されました。しかし真の再生は19世紀に訪れます。1858年、国民博覧会の開催に合わせて城は修復され、壮麗なヴァレンティーノ公園の整備によって再び都市と結びつきました。

科学と文化の拠点

今日、城はもはや王家の居所ではなく、学術と文化の場として新たな役割を担っています。1859年以来、ここにはトリノ工科大学 (Politecnico di Torino) が置かれ、当初は「王立工学応用学校」として設立されました。現在では建築学部の拠点となっています。回廊を歩くと、かつてのサヴォイア家の壮麗な行進の面影とともに、現代の学生たちの活気も感じられます。1997年にはユネスコ世界遺産に登録され、ヴァレンティーノ城はトリノの優雅さを今に伝える存在となっています。

各広間

黄道の間 (Sala dello Zodiaco)

天井には神話的主題の大きなフレスコ画が描かれ、ポー川は海神ネプトゥヌスの姿で擬人化されています。これはトリノの地の力と豊かさを象徴しています。

百合の間 (Sala dei Gigli)

この部屋はクリスティーナ公妃の居室の一部でした。

青地に金色の百合が密に描かれており、これはフランス王家の紋章を表しています。クリスティーナが祖国との結びつきを示すために選んだ装飾です。

榮譽の間 (Sala d'Onore)

フレスコ画には栄光の場面や神話的寓意が描かれ、公爵権力の安定と繁栄が表現されています。

城はまた、ポー川での「水上戦」や騎士競技会といった壮大な催しでも知られ、当時の年代記作者たちはそれを比類なき華麗さを誇る行事として記しています。

リングット (LINGOTTO)

「リングット (Lingotto)」という名称は、通常は溶解後に形成される金属の延べ棒を連想させます。しかしここでは、かつて貴族家が所有していた土地の地名であることに加え、**リングットは工業的なトリノの象徴的建造物**でもあります。**20世紀**を象徴する巨大なコンクリート建築であり、今日では文化・商業・デザインの中心地へと生まれ変わりました。



リングットは単なる建物ではなく、近代建築史における重要な一章でもあります。

1923年、建築家ジャコモ・マッテ＝トゥルッコ (Giacomo Matté-Trucco) は「**垂直型工場**」として知られる革新的な設計を実現しました。原材料は地上階から搬入され、自動車は組み立て工程に従って上階へと順に移動します。そして完成した車両は最上階から直接、屋上のテストコースへと走り出しました。当時、これは世界でも最先端の工業施設の一つと見なされていました。

1982年にFIATの生産がミラフィオーリへ移転した後、建築家レンゾ・ピアノ (Renzo Piano) がこの複合施設の再開発を任されました。彼は旧工場をホテル、講堂・会議センター、商業施設、オフィスを備えた多機能空間へと再生させ、トリノの産業史を象徴する建物に新たな命を吹き込みました。

見どころ

屋上テストコース (La Pista 500)

リングットを象徴する最も印象的な要素です。全長約**1キロメートル**のテストコースが屋上に設けられ、二つの壮大なバンクカーブを備えています。現在では**ヨーロッパで最も高い屋上庭園**へと変貌し、**4万本以上の植物**が植えられています。一般公開されており、アルプスと市街地の素晴らしい景色を楽しむことができます

「宝石箱」と「バブル」

レンゾ・ピアノは屋上に二つの未来的な構造物を加えました。

- **バブル**：ガラスと鉄で造られた球形の会議室で、宙に浮かんでいるかのように見え、ヘリポートも備えています。
- **宝石箱**：吊り構造の金属建築で、アネッリ美術館 (Pinacoteca Agnelli) を収蔵し、カナレット、マティス、ピカソなどの作品を展示しています。

螺旋状スロープ

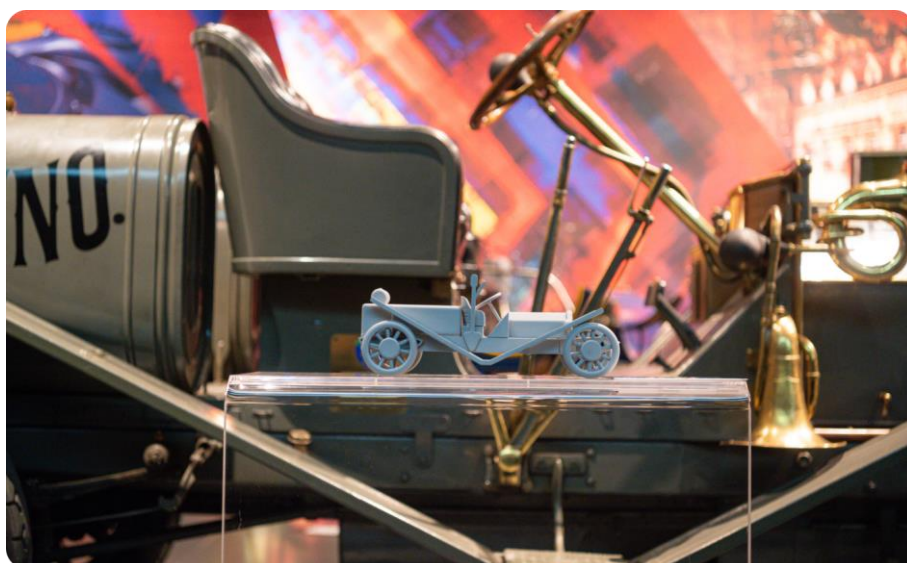
屋上コースへ車両を導くため、建物の両端には巨大な螺旋スロープが設けられました。これは工学的傑作とされ、ル・コルビュジエもリングットを「工業が生み出した最も印象的な光景の一つ」と称賛しました。



MAUTO – NATIONAL AUTOMOBILE MUSEUM

リンゴットから徒歩数分の場所に、国立自動車博物館（MAUTO）があります。1933年に設立され、世界でも最も歴史と名声を誇る自動車博物館の一つとされています。80以上のブランドから200台を超える実車が収蔵され、自動車の誕生から現代デザインに至るまでの進化を、技術的・科学的・歴史的観点から紹介しています。

訪れる価値の高い施設です。



王宮 (ROYAL PALACE)



都心に位置する王宮は、サヴォイア家にとって最も重要な王室居城の一つであり、ユネスコ世界遺産にも登録されています。17世紀以降、ここはサヴォイア家の公式居所として用いられ、公国、サルデーニャ王国、そして統一イタリアを統治する拠点となりました。

簡素で端正な外観の背後には、壮麗な内部空間が広がり、権力、美意識、そして宮廷の日常生活の物語が息づいています。

見学コースには、**大階段**、**玉座の間**、**舞踏の間**、**鋏の階段 (シザーズ・ステアケース)**、そして**聖骸布礼拝堂**など、特筆すべき空間が含まれています。

それぞれの部屋は、バロックおよび新古典主義芸術への旅でもあり、漆喰装飾、タペストリー、当時の家具、そして巨匠たちの絵画によって彩られています。特に印象的なのが**王室居室**です。国王や王妃の寝室、応接室、書斎、私室などが並び、公式の華やかさだけでなく、王家の私的な生活の側面——日々の儀式、家族関係、そして静かなひととき——も感じ取ることができます。

私的居室は、さらに控えめで洗練された雰囲気を用意しています。その装飾や当時の家具は、18世紀および19世紀の趣味や流行を映し出しています。ここには、イタリア初代国王ヴィットーリオ・エマヌエーレ2世やマリア・アデライデ王妃といった歴史的人物が暮らしていました。

王宮を訪れることは、数世紀にわたる歴史、芸術、政治の世界へと身を置き、イタリア国家誕生においてトリノが果たした中心的役割を理解することでもあります。この街の王侯的な精神に触れ、ヨーロッパ有数の博物館複合体を鑑賞したい方にとって、欠かすことのできない訪問地です。

The Royal Palace of Turin, located in the very heart of the city, is one of the most

見どころ

鋏の階段 (Scissors Staircase)

鋏の階段は、建築家フィリッポ・ユヴァッタによる王宮内でも最も有名な作品の一つです。限られた空間の中で一階と二階の婚礼用居室を結ぶ階段を設計するという困難な課題を克服し、重厚な支柱に頼らずに「浮かんでいる」かのように見える構造を実現しました。これはバロック工学の驚異とされています。

その名称は、中央のスロープ天井に施された装飾に由来します。そこには、二股に分かれた舌を鋏で切り取る姿が漆喰で表現されています。当時、ユヴァッタがこのような狭い空間に安全な階

段を建設することは不可能だと陰でささやかれていました。しかし完成後、彼はこの装飾によって批判者たちの「舌」を象徴的に切り落とし、優雅な芸術的報復を成し遂げたのです。



聖骸布礼拝堂 (CHAPEL OF THE HOLY SHROUD)

聖骸布礼拝堂は、世界でも最も神秘的かつ壮麗なバロック建築の傑作の一つです。17世紀後半に、修道士であり数学者でもあった建築家グアリーノ・グアリーニ (Guarino Guarini) によって設計されました。この礼拝堂は、サヴォイア家が所蔵していた最も貴重な聖遺物——聖骸布 (Sindone) を安置するために建設されました。聖骸布とは、キリストが十字架刑の後に包まれたと伝えられる亜麻布のことです。

重力に挑む建築

礼拝堂の最も印象的な要素は、そのクーポラ (ドーム) です。グアリーニは、幾何学的に組み合わせられたアーチを幾重にも重ねる構造を考案し、上へ行くほど細くなる構成によって、実際以上に高く見える視覚効果を生み出しました。天井を見上げると、小さな開口部から差し込む光が空間を満たし、まるで天上へと導かれるかのような印象を与えます。

建築全体は、象徴的な精神的上昇の道として構想されています：

- **黒大理石**：下部にはフラボナーザ産の黒大理石が用いられ、墓、死、そして罪を象徴しています。
- **上昇の構成**：視線を上へと移すにつれ、色彩は明るくなり、幾何学的構造はより複雑になります。これは地上から天上へ、死から復活への移行を象徴しています。
- **太陽の星**：クーポラ中央には星が輝き、その内部には聖霊の鳩が表されています。これは光と希望の頂点を示しています。

聖骸布礼拝堂は単なる建築物ではありません。そこには信仰、科学、象徴性が融合し、幾何学と精神性が一体となった、ヨーロッパ・バロック芸術の中でも最も感動的な空間の一つが広がっています。



パラッツォ・マダマ (PALAZZO MADAMA)

トリノの地理的中心であるカステッロ広場 (Piazza Castello) に位置するパラッツォ・マダマは、ひとつの建物の中に二千年の歴史を宿す、世界でも類を見ない存在です。この宮殿を訪れることは、ローマ時代の遺構、中世建築、バロック芸術、そして近代文化が調和するトリノの多層的な精神に触れることでもあります。

その名称は、「王妃たち (Madame Reali)」と呼ばれた二人の女性、すなわちフランスのクリスティーナとサヴォイア＝ヌムールのマリア・ジョヴァンナ・バッティスタに由来します。彼女たちは 17 世紀から 18 世紀にかけて、この宮殿を主要な居所として用いました。

パラッツォ・マダマの最大の特徴は、その二重の姿にあります。18 世紀に建てられた西側のファサードは、建築家フィリッポ・ユヴァッタによるバロックの傑作であり、明るい石材、大きな窓、彫像によって構成されています。しかし建物を回り込むと、中世の姿が現れます。赤レンガの塔は、アウグスタ・タウリノルム時代のローマ城門の基礎の上に築かれ、かつての堀には中世の植物園が広がっています。



パラッツォ・マダマは、イタリア政治史においても重要な象徴です。サヴォイア王朝時代には上院が置かれ、1861 年以降はイタリア王国の上院として使用され、統一国家の誕生に中心的な役割を果たしました。

現在、この宮殿にはトリノ市立古代美術館が設けられていますが、訪問者を最も魅了するのは建物そのものの空間です：

- **記念的大階段 (The Monumental Staircase):** ユヴァッラによって設計されたこの階段は、自然光を豊かに取り入れる構造となっており、主階 (*piano nobile*) へと上る体験そのものが演劇的な演出となっています。世界でも屈指の壮麗な階段の一つとされています。
- **主階 (Piano Nobile):** 二人の「王妃」のために装飾された一連の広間が並び、鏡、金箔装飾、フレスコ画が 17 世紀から 18 世紀の宮廷生活を物語っています。
- **中国の間 (The Chinese Cabinet):** 全面が金箔の漆装飾で覆われたこの部屋は、18 世紀における異国趣味を象徴する真の宝石といえる空間です。

さらに中世の塔に上ると、トリノの屋根越しにアルプスを望む 360 度の眺望を楽しむことができます。

カリニャーノ宮 (PALAZZO CARIGNANO)

カリニャーノ宮は、ヨーロッパ・バロック建築の中でも最も独創的で大胆な作品の一つとされています。この宮殿は 1679 年、建築家グアリーノ・グアリーニ (Guarino Guarini) によって、サヴォイア＝カリニャーノ家のエマヌエーレ・フィリベルト公のために設計されました。建築的傑作であると同時に、イタリア国家の歴史を象徴する重要な建物でもあります。この宮殿では、カルロ・アルベルト (1798 年、サルデーニャ王) と、その息子でイタリア初代国王となるヴィットーリオ・エマヌエーレ 2 世 (1820 年) が誕生しました。さらに 1861 年、統一イタリアの最初の議会がここで開催されました。

ファサード：波打つ煉瓦の造形

宮殿の最大の見どころは、カリニャーノ広場に面した独特の曲線を描くファサードです。当時の厳格で直線的な貴族宮殿とは異なり、グアリーニは凹凸が交互に連なる動きのある構成を採用し、建物に生命感を与えました。

ファサードは石材や大理石ではなく、むき出しの煉瓦のみで構成されています。これはピエモンテ・バロック建築の特徴です。グアリーニはこの「素朴な」素材を高度な芸術表現へと昇華させ、装飾的なフリーズや幾何学模様によって、温かみと威厳を兼ね備えた外観を創り出しました。

中央の凸状部分の内部には壮麗な楕円形のアトリウムが広がり、外観の曲線に沿って二つの記念的階段が配置されています。これはバロック工学の傑作といえるでしょう。

建物を回り込むと、19 世紀に建てられたもう一つのファサードが現れます。カール・アルベルト広場に面した白石造りの折衷様式の立面です。

内部では、金箔の木装飾や鏡で彩られた公子の居室を見学することができます。また、イタリア統一運動国立博物館も併設されており、赤いビロード張りの座席が残る旧サルデーニャ議会の議場が保存されています。



見どころ

主階の窓の上部をよく見ると、**アメリカ先住民の羽飾り**を思わせる装飾が施されていることに気づきます。これは北米先住民を象徴する意匠であり、**1667年**にカリニャーノ連隊がフランス軍とともにカナダでイロコイ族に勝利した出来事を記念しています。



ランゲ地方 (LANGHE)——ランゲ地方——丘陵の海

トリノから車でわずか1時間あまりの場所に、ピエモンテ南部の歴史的な地域ランゲ地方が広がっています。ランゲは単なる観光地ではなく、人と自然が見事な調和を保つ真の文化的景観であり、2014年にはユネスコ世界遺産に登録されました。

「ランゲ」という名称は、古代ケルト語で「土地の舌」を意味する語に由来すると考えられています。実際、この地域は細長い丘陵が平行に連なる独特の地形によって特徴づけられています。

- **バッサ・ランガ (Bassa Langa):** アルバ周辺に広がる最も有名な地域です。気候は比較的穏やかで、斜面にはネッピオーロ、バローロ、バルバレスコなど、世界的に名高いワインを生む葡萄畑が広がっています。
- **アルタ・ランガ (Alta Langa):** アペニン山脈に近づくにつれ、風景は変化します。葡萄畑は森林へと姿を変え、空気はより澄み、ヘーゼルナッツ畑や牧草地が広がります。

城と中世の村々

ランゲのほぼすべての丘の頂には、城や中世の塔が建っています。バローロ、グリンツァーネ・カヴール、セッラルンガ・ダルバ、ラ・モッラなどの村々は、アルプスを背景にした絵画のような景観を見せてくれます。

バローロ (BAROLO) とその城



バローロは単なる村ではなく、城によってその歴史と運命を形づくられた、まさに世俗の「ワインの聖地」といえる存在です。

城の最初の石は**10世紀**に積まれ、ハンガリー人やサラセン人の侵攻から守るための防衛拠点として築かれました。決定的な転機は**1250年**、有力なファレッティ家 (**Falletti**) が城を取得したときに訪れます。

その後、厳格な中世の要塞は、時代とともに優雅な貴族の田園邸宅へと姿を変えていきました。真の革新が起こったのは**19世紀**のことです。ジュリア・コルベール・ファレッティ侯爵夫人 (**Giulia Colbert Falletti**) と、フランス人醸造家ルイ・ウダール (**Louis Oudart**) の尽力によって、地元のネッピオーロ種の醸造技術が改良され、バローロ・ワインが誕生しました。

2010年以降、城内には **WiMu (ワイン博物館)** が設けられています。この博物館はフランスのフ・コンフィーノ (**François Confino**) によって設計され、体験型・感覚型の展示が特徴です。見学ルートは最上階から始まり、地下のワインセラーへと徐々に下っていきます。これは、太陽のもとで育った葡萄が樽の中で熟成していく過程を象徴的に再現したものです。

見どころ:

「王のワイン」

伝説によれば、ジュリア侯爵夫人はカルロ・アルベルト王に **325 樽 (carrà)** のバローロを贈ったといわれています。これは齋戒日を除いた一年の日数に相当し、王がこの評判のワインをぜひ味わいたいと望んだためでした。こうしてバローロは宮廷のワインとなり、「ワインの王、王のワイン」という称号を得ました。

城からの眺望

城の窓からは、**360 度**に広がる丘陵の景観を一望することができます。丘は整然と並ぶネッビオーロの葡萄畑によって覆われ、まるで梳かれたかのように美しく連なっています。ネッビオーロは非常に繊細で高貴な葡萄品種で、秋の霧 (イタリア語 ***nebbie***) を好み、その名もそこに由来します。この品種からは、ネッビオーロそのもののワインに加え、バローロとバルバレスコという二つの偉大な赤ワインが生まれます。

バローロは、バローロ村を含む **11** の特定自治体で栽培されたネッビオーロのみを使用して造られます。**38** か月以上熟成させることが義務づけられ、そのうち少なくとも **18** か月はオーク樽で熟成されます。その力強い構造と豊かな香りから、「ワインの王」と称されています。

一方、バルバレスコはタナロ川に近い地域で栽培されたネッビオーロから造られます。土壌の化学的特性とやや温暖な気候の影響を受け、**26** か月以上熟成 (うち最低 **9** か月は樽熟成) されます。より繊細で滑らかな口当たりと華やかな香りから、「ワインの女王」と呼ばれています。

フォンタナフレdda (FONTANAFREDDA)



フォンタナフレddaは、城を擁するランゲ地方の村でもなければ、単なる丘でもありません。ここはバローロのワイナリーであり、葡萄畑に携わる人々が地域社会と自然と調和しながら暮らせるよう整えられた場所です。多くの美しい物語と同じように、フォンタナフレddaの誕生もまた一つの大きな愛の物語から始まりました。それは、イタリア初代国王ヴィットーリオ・エマヌエーレ2世と、平民出身の若い女性ローザ・ヴェルチェッラーナ (**Rosa Vercellana**) との愛

でした。国王は彼女をピエモンテ方言で*La bela Rosin*（「美しいロジン」）と親しみを込めて呼んでいました。

フォンタナフレダを本当に理解するために.....私たちは実際にそこを訪れます。

グリンツァーネ・カヴール (GRINZANE CAVOUR)



また一つの丘、そして城に見守られた村—それがグリンツァーネ・カヴールです。その外観は、13世紀の中世の要塞としての厳格な雰囲気は今もなお保っています。

イタリア統一運動の中心人物であり、サルデーニャ王国首相を務めたカミッロ・ベンソ・ディ・カヴール伯は、ここに17年間居住しました。彼はジュリア・ファッレットティ侯爵夫人とともに、ネッビオーロ種の醸造技術を改良し、真のバローロ・ワインを完成させるという野心的な計画を推進しました。

毎年11月、城の広間ではアルバ産白トリュフ世界オークションが開催されます。この白トリュフは世界で最も貴重なものの一つとされ、美食家たちから高く評価されています。この特別な催しは衛星中継によって世界に配信され、時には10万ユーロを超える価格で落札されることもあり、その収益はすべて慈善活動に充てられます。



モーレ・アントネリアーナ (MOLE ANTONELLIANA)

モーレ・アントネリアーナ（モーレ）は、単なる記念建築ではありません。トリノを象徴する存在であり、その時代においてほぼ不可能ともいえる建築的挑戦であり、多くの特別な物語を宿しています。

すべては **1863** 年に始まりました。当時、トリノのユダヤ人コミュニティは、数年前に獲得した信仰の自由を記念して新しいユダヤ教会を建設することを決定しました。その設計は、先見性に富んだ建築家アレッサンドロ・アントネッリ (**Alessandro Antonelli**) に委ねられました。

当初の計画では高さはわずか **47** メートルでした。しかし建設中、アントネッリは設計を何度も変更し、階層を追加し、クーポラ（ドーム）をさらに高くしました。**1869** 年には建設費は当初の三倍に膨れ上がり、高さもほぼ倍増していました。最終的に、費用と遅延に耐えかねたコミュニティは建物をトリノ市に譲渡しました。

モーレが **1889** 年に完成したとき—それはパリのエッフェル塔と同じ年でした—その高さ **167.5** メートルにより、当時世界で最も高い煉瓦造建築となりました。

2000 年以降、モーレには**国立映画博物館**が設けられています。これはイタリアでも来館者数の多い博物館の一つです。展示は建物内部を螺旋状に上昇しながら進む構成となっており、クーポラの構造そのものを体験することができます。

見どころ

落ちた天使

もともと尖塔の頂には翼を持つ「天才像」が立っていました（しばしば天使と誤解されます）。**1904** 年、落雷によりこの像は崩れ落ちました。現在は有名な**十二角の星**が頂部を飾り、元の像は博物館内に保存されています。

1953 年の嵐

1953 年 **5** 月 **23** 日、激しい嵐により尖塔が折れ、下の庭園に落下しました。幸いにも死傷者は出ませんでした。再建時には鋼鉄製の芯が挿入され、耐風性が強化されました。

宙に浮くエレベーター

パノラマエレベーターは圧巻の体験です。ガラス張りのキャビンが内部空間を上昇し、**85** メートルの高さにあるテンピエット（小神殿）まで到達します。オンライン予約:

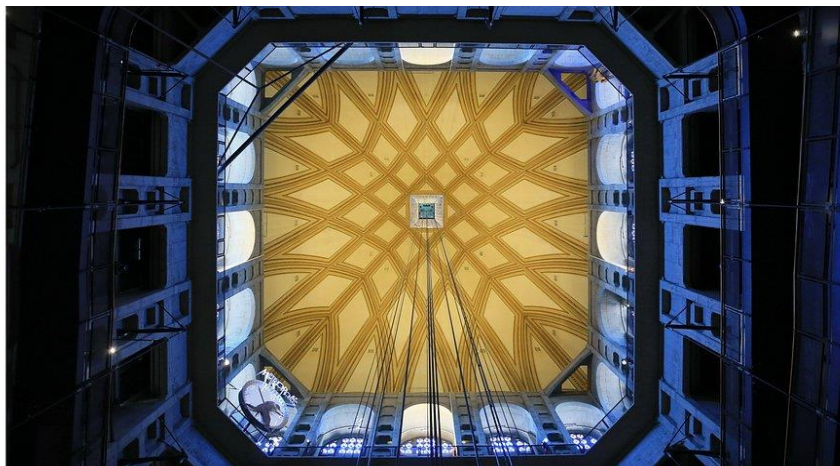
<https://cinema.museitorino.it/eventi/ingresso-ascensore-panoramico>.

夜のライトアップ

クーポラ（ドーム）はしばしば芸術的な照明で彩られます。最も有名なのは、芸術家マリオ・メルツ (Mario Merz) による《数字の飛翔》で、**フィボナッチ数列**が赤いネオンで外壁に表示されます。

絶好の撮影スポット

最高の写真を撮るには、ヴィットリオ・ヴェネト広場、または夕暮れ時にモンテ・デイ・カプチーニへ登るのがおすすめです。アルプスを背景にしたモーレの姿は格別です。



スペルガ大聖堂 (BASILICA OF SUPERGA)

モーレ・アントネリアーナがトリノの魂を象徴するとすれば、スペルガ大聖堂はこの街の王冠といえる存在です。

標高 672 メートルの丘の頂に建つこの聖堂からは、ヨーロッパ屈指の壮大な眺望が広がります。1728 年、思想家ジャン＝ジャック・ルソーはこの景色を「人の目が見うる最も美しい光景」と称えました。

スペルガ大聖堂は、**1706** 年に立てられた宗教的な誓願に由来します。当時トリノはフランス軍に包囲され、危機的状況にありました。サヴォイア公ヴィットーリオ・アメデーオ 2 世は丘に登り、戦況を見渡しました。聖母像の前で、公は勝利を得られたならばこの地に壮大な教会を建設すると誓いました。

やがてサヴォイア軍は勝利を収め、公は誓いを果たします。**1717** 年、建築家フィリッポ・ユヴァッタに設計が委ねられました。安定した基盤を築くため、ユヴァッタは丘の頂を約 40 メートル削り取るという大胆な工事を命じました。



見どころ

王家の墓所

聖堂の地下にはサヴォイア家の王家霊廟があります。王や王子たちが壮麗な石棺の中に眠るこの場所は、ヨーロッパでも最も重要な王朝墓所の一つとされています。

教皇の回廊

修道院の一角には、聖ペトロから現代に至るまでの教皇の肖像画がすべて揃う、世界でも類を見ないコレクションがあります。

クーポラ

狭い螺旋階段を 131 段上るとクーポラ（ドーム）に到達します。晴天の日には、海沿いアルプスからペンニネ・アルプスまで見渡すことができ、遠くにはモンテ・ローザやマッターホルンも望めます。

ラック式鉄道

サッシ＝スペルガ鉄道は**1884**年に開通し、ポー川近くの麓と丘の頂を結んでいます。**1934**年製の木製車両が今も使用され、まるで時をさかのぼる旅を体験できます。

「グランデ・トリノ」の悲劇

聖堂の背後には記念碑的な壁があります。**1949**年**5**月**4**日、伝説的なサッカーチーム**グランデ・トリノ**を乗せた飛行機がここに墜落し、全員が亡くなりました。今日でもこの場所は世界中のサッカーファンにとって巡礼の地となっています。

ストゥピニジ狩猟館 (STUPINIGI)

ストゥピニジ狩猟館は、トリノ南西部に位置する壮麗なサヴォイア家の離宮です。この建物はヴィットーリオ・アメデーオ 2 世の命により建設され、建築家フィリッポ・ユヴァッタによって設計されました。ここは恒久的な居住地としてではなく、狩猟の拠点、狩りの後の祝宴の場、宮廷の余暇のための空間、そして重要な賓客を迎えるための象徴的な舞台として構想されました。

バロック建築の傑作であるこの建物の中心には楕円形の大広間があり、そこから四つの翼部が聖アンドレア十字形に広がっています。この構造により、主広間の窓から狩猟の様子を見渡すことができました。

ストゥピニジを訪れた著名な人物には、神聖ローマ皇帝ヨーゼフ 2 世 (1769 年)、後のロシア皇帝パーヴェル 1 世 (1782 年)、フェルディナンド 1 世 (1785 年)、そして 1805 年に訪れたナポレオン・ボナパルトとその妹ポーリーヌが含まれます。19 世紀末には、サヴォイア王妃マルゲリータの夏の離宮としても使用されました。

見どころ

視覚効果と錯覚の演出

ユヴァッタは舞台的な空間演出の名手でした。中央広間の壁画や天井画には精巧なトロンプ・ルイユ (だまし絵) が用いられ、実際よりも広大に感じられる空間が生み出されています。

屋上の鹿

クーポラ (ドーム) の頂には大きな鹿の像が立っています。現在見られる像は 1766 年の原作の複製であり、オリジナルは保存のため屋内に移されています。

庭園の象

1827 年、サヴォイア王カルロ・フェリーチェはエジプト副王からインド象フリッツ (Fritz) を贈られました。この象はストゥピニジの庭園で 20 年以上暮らし、地域の伝説的存在となりました。現在、フリッツの遺骸はトリノ自然科学博物館に保存されています。



ヴェナリア王宮 (REGGIA DI VENARIA REALE)

ストゥピニジがサヴォイア家の週末の離宮であったとすれば、ヴェナリア王宮は彼らによるヴェルサイユ宮殿への対抗ともいえる存在です。

その規模は単なる「宮殿」という言葉では表しきれず、狩猟と祝宴、そして何よりもサヴォイア王朝の栄光を体現するために築かれた一つの都市のような複合建築群です。

起源と発展

ヴェナリア王宮の歴史は、輝かしい繁栄と深刻な衰退を繰り返してきました。この王宮はカルロ・エマヌエーレ 2 世の命により建設され、豊かな狩猟地に囲まれた場所に、儀式と狩猟のための王室居所を築くことを目的としていました。

設計は建築家アメデーオ・ディ・カステッラモンテに委ねられました。彼は王宮を広大な庭園に囲まれた壮大な計画の中心として構想し、宮廷の機能を支えるために新しい町も整備しました。

その後、フィリッポ・ユヴァツァとベネデット・アルフィエーリが建築群を拡張し、ディアーナ回廊、聖ウベルト礼拝堂、シトロニエーラ（柑橘温室）、大厩舎など、数々のバロック建築の傑作が加えられました。

衰退と修復

ナポレオンの到来により、王宮は本来の役割を失い、軍の兵舎として使用されました。庭園は訓練場となり、壮麗な広間は厩舎や弾薬庫へと転用されました。その後も軍の施設として使われ続け、第二次世界大戦後には深刻な荒廃状態に陥りました。

20 世紀末になってようやく大規模な修復計画が開始され、王宮の栄光を取り戻すことが目指されました。8 年以上にわたる修復作業の末――これはヨーロッパ最大級の文化修復プロジェクトの一つでした――2007 年、ヴェナリア王宮は再び一般公開されました。

見どころ

ディアーナ回廊：光と空間の演出

ユヴァツァ設計のディアーナ回廊は、長さ 80 メートル、幅 12 メートル、高さ 15 メートルを誇ります。市松模様の床と大きな窓が、空間が果てしなく続くかのような視覚効果を生み出しています。漆喰装飾には狩猟の神々に関連する象徴的な物語が描かれています。

再生された庭園

長年にわたり、ヴェナリアの庭園はほとんど消失し、泥地と軍事施設の痕跡だけが残されていました。現在の庭園は 17 世紀の設計図に基づいて再構築され、現代景観設計の傑作と評価されています。

シトロニエーラ（柑橘温室）

シトロニエーラは 148 メートル×14 メートルの規模を持つ南向きの大回廊で、大厩舎の隣に位置しています。冬季に柑橘類の木々を保護するために設計されました。





サヴォイア家のブチントー

ユヴァッラの大厩舎には、18世紀のヴェネツィアの儀式船であるブチントーロが保存されています。これは同種の船として現存する唯一のものであり、ヴィットーリオ・アメデーオ2世の命により建造され、水路を通じてヴェネツィアからトリノへ運ばれました。金箔と彫刻で飾られたこの船は、18世紀の王室ヨットともいえる存在です。

